

「広げる 行動する 勇気！」

熊本県人権子ども集会

「部落差別をはじめあらゆる差別をなくす熊本県人権子ども集会」が10月13日(土)、熊本市のパークドーム熊本であり、県内の小・中・高校生と関係者、8千人を超える参加がありました。

この集会は、中・高校生の子ども実行委員会を中心に運営されています。会の冒頭では子ども実行委員長が、東日本大震災に遭った高校生との交流で「事実を直視し、真実を知ること、自分のこととして考えることの大切さ」を改めて考え、「強い思いでステージに立つ」と決意を述べました。

児童生徒の活動・報告から

●小学校からは、全校児童80人全員がステージに立ち、学校での人権集会の取り組みを報告しました。みんなに知って欲しい自分のきつい思いを発表した1年生。それを涙しながら聞く友だちやそれに返していく友だち。そんな集会を通して子どもたちは「自分のこと、家族のこと、友だちのこと、がんばりに気づかせてもらったこと」もって、

もつと家族や友だちが好きになれたこと」「これからもつながっていくこと」を語ってくれました。

きたこと。今は、つながることの大切さを伝えられる教師になりたいと夢を持っていることを語ってくれました。

●家族と離れて暮らす中学3年生は、自分の生き方を見つめ直し、「つらい未来の想像ばかりしかできなかった。でも、2年生の進路公開では、自分の話を真剣に聞いてくれ、涙を流して自分のことを語ってくれる仲間がいた。信頼できる仲間がいるから、ありのままの自分を見せることができ。友だちの言葉が、私の力になっていく。今は、パティシエになるという自分の夢を追うことができている」と力強く語ってくれました。

参加者は、思いのたくさん詰まった報告を、あるときは涙し、あるときは笑顔でしっかりと受け止め、参加した小学生からは「私もいじめ、差別を受けたことがあります。自分で立ち向かっていきたい」と自分の思いを返しました。

●いじめられた経験をもつ高校生は「仲間って何？」と参加者に問いかけました。小学校から続きたいじめに、人を信じられなくなった中学の頃。高校になって自分のことを語り合える仲間ができて、いじめによって失いかけていた人によって信じていく大切さや、つながることの大切さを教えられ、いじめをはね返す力がついて

ファイナルでは「事実を知り、考え、その思いを、心を、たくさんの人に届けてください。勇気を持って行動に移していきましょう。まずは、私たちから差別をなくすための一歩を踏み出しましょう」との子ども実行委員の力強い呼びかけは、全員での「広げる 行動する 勇気！」の大合唱にかわりました。

益城町教育委員会

ふるさとの地名漫歩

歴史の変遷と地名

352

飯田山常楽寺⑫

それで(ささやかな)喜捨をされた多くの人々よ、あなたの福は長者の布金(長者の豊かで高価な布や金銀の布施)を超え、祈願を込めて寄付された善良な人々よ、その功績は童子の聚沙(童子が戯れに砂を集めて仏塔を作りこれを供養するまねごとをした、これが成仏結縁の始まりとされる)に勝るであろう。

昔日、寺の建設に壁泥を一塗りしてでも奉仕したように、5人の僧がいてそのうちの一人が俗界で生活費を得て4人の僧の得道を支えた。その人は死後天人に転生し「壇弥難長者」と呼ばれ、7種の布施を人々に施し転輪王(王身に三十二相を備える仏像)の仏の恵みを得た故事がある。

いわんや大土寶座(常楽寺本尊を安置する壇)を再建するように臣下が主君に仕えるように仏に仕えていけば、桃杏が咲く春の喜びのような、めでたいことに、どうして我々があうことがないと言えようか。現にこの世で三災七難の困厄を攘い菩提樹の下に仏教理想の場所(四土)の時代

が来るだろう。親しい人もそうでない人も(親疎俱利)ともに(仏の)恵みを受け、貴族も地位の低い人も(貴賤同齊)同じである。

稽首(座ってしばらく頭を地面につけている最高の礼)。敬白(謹んで申しあげます)。幹縁主
飯田山之優婆塞圓齋豪澄

寛永四歳舎丁卯五月穀旦 印

常光寺比丘 秋潤 日収 勤織

以上が妙永寺所蔵の常楽寺幹縁文の意訳です

益城町文化財を訪ねる会
会長 松野國策



常楽寺繁栄の絵図